

夏期集中講義を初めて受講しました

ようやく夏の残暑も遠のき秋の訪れを感じる頃になってまいりましたが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。今年の夏は例年類を見ない酷暑だったそうで、涼しい時期になるのが大変待ち遠しかったことでした。そんな頃、長期休暇中の特別講義を受けてきましたので今回少し振り返ってご報告の機会を頂きます。

弊学は 8 月 9 月が全て長期休みになっており、その期間中には希望者向けに集中講義という形式で短期集中の講義が複数開講されています。先日 4 回生にして初めて受講してきたので今回はその体験記とさせていただきます。集中講義と書くと如何にも何か他の授業とは異なる特別な演習のように思われますが、講義の形式は通常の授業とそう変わるものではありません。ただし、通常の授業は前期後期それぞれ 4 か月強かけて 15 回の授業をするところ、集中講義では回数はそのままだに全ての講義を大体一週間前後で終わらせることになるため、非常に過密なスケジュールで行われます。授業を担当していただく先生によって異なりますが大抵 1 日 3 コマ×五日や 1 日 5 コマ×三日といったような予定のもと、数日間同じ教室で缶詰めになってひたすら授業を受講することになります。この制度の良いところは、普段ならお話を聞けない他大学からお招きした先生方に講義をしていただくことです。今回授業をしてくださった先生が普段いらっしゃる大学にはこの集中講義の類の制度がないと伺い、紹介させて頂こうと思った次第です。

集中講義はかなり多くの数が開講されており（この夏期休暇中は弊学部のみでも 37 個予定されているようでした）、夏休みの二か月間それぞれの週に複数の授業が同時に開講されているという具合です。今回私が受講したのは、重田園江さんという普段はフーコー研究者の先生による、アーレントという政治哲学者を中心とした「真理の政治化」というテーマでの授業でした。ちなみにその授業の裏番組では「暇と退屈の倫理学」という著書が有名な國分功一郎さんがスピノザについて授業されていたようです。重田先生の授業は「真理の語り手」という著書を教科書に、第二次世界大戦から最近のウクライナ戦争に至る戦争を例に「なぜ非常事態においては真理が絶対的なものではなく人それぞれ自分に都合の良い道具として用いられてしまうのか」という内容についての講義でした。とても興味深い本だったのでお時間のある方はぜひ一読をおすすめしたいです。今は戦後だという認識がウクライナ戦争の勃発によって激変した現代を生きる私たちにとって、非常に示唆に富む一冊でした。紙幅の都合上内容を詳細に書くことを避けますが、第一章を中心にまとめると以下の様な内容でした。

現代はポスト・トゥルースの時代と言われます。これは、現代において事実という言葉

は実際に事態がどうであるかを示すのではなく、人々が何を信じたいかを反映したものが事実として捉えられているということを意味します。例え思っていたことと反する事実が出てきたとしても、それは作り出された嘘だと言い張ることや、あなたはそれを信じればよいが私は信じないと言うことがまかり通るようになります。陰謀論などがまさに良い例でしょう。奇妙な論理を用いて政府の壮大な陰謀を告発しようとする陰謀論者は、何も危害がないうちは笑い話の種になることもしばしばですが、熱狂的な信者によって実際に暴力が起こされると途端に事態は深刻になります。戦時中などの異常事態にはとりわけ人々が信じたいと思うことにそぐわない事実は事実として捉えられないようになります。本書の中でもそのような例としてベトナム戦争やウクライナ戦争があげられます。驚くべきことに、現地の惨状を直に見た現場の兵士たちからの報告がゆがめられており実際の命令を下す指揮官たちに正確な情報が届いていなかったり、正確に届いてはいたが民衆が望んでいる結果に合わせて政治家が嘘を真実として告げてしまったりしたようです。そして戦況は思わぬ泥沼にはまり、多くの人が無意味な目的のもと被害に遭ってしまったのだと。このように事実が各々によってゆがめられる例として、ウクライナの都市において行われたロシア軍による虐殺が授業にて説明されました。あの残虐なロシア軍の振る舞いもロシア側から見れば「ウクライナ軍による自作自演」、「そもそもそんな虐殺はなかった」と主張され、たとえ動画や写真などの記録を突きつけても捏造だと解釈されることもあったそうです。このように真実の一つではないどころか、自分に都合のいい真実を各々が作り出せる時代が現代であり、とりわけそれが政治的な文脈で行われると多くの犠牲につながることが示唆されていました。「真理の語り手」の第一章は次のように締めくくられています。「だが、嘘つきの政治指導者を、私たちは決して許すべきでも多めに見るべきでもないのだ。政治家の嘘を黙認することは、果てなき暴力と殺人を認めることと同じなのだから。」

少し長々と書きすぎてしまいましたが、今回はここまでとさせていただきます。もし興味を持っていただけた方がいましたら秋の涼しい夜長にぜひいかがでしょうか。末筆ではございますが、季節の変わり目でございますのでご自愛のほどお祈り申し上げます。

本文中で触れた思想家について

・ ミシェル・フーコー

20世紀に活躍したフランス現代哲学者。思想史での研究や、他にも作家や文芸評論家としての活動、政治活動家としても知られる。著書『監獄の誕生』や『言葉と物』などで権力や知識についての議論が有名。

本文内での紹介文献

・ 重田園江(2022). 『真理の語り手 アーレントとウクライナ戦争』. 白水社.